雨後晴

今給黎靖子

電話が鳴った。受話器を取ると、
「僕、李祥兆（ショウチョウ）です。二年前、先生のクラスにいた李祥兆です。今、先生の家の近くまで来ているんですけど、ちょっと寄らせてもらってもいいでしょうか」
「ああ、いいですよ。どうぞ」と言って、受話器を置いた。唐突な電話で驚いたが、近くを通ったか何かで、ちょっと寄る気になったのだろうと思った。
受話器を置いて二、三分もしないうちに玄関の呼び鈴が鳴った。戸を開けて、「まあ、久しぶりね。お上がりなさい」と言ってスリッパを勧めると、
「先生に相談したいことがあって来たんです。いいですか」
「そりゃ、いいよ」
ちょっと寄り道かと思っていたら、目的があって来たのだ。こんなところがやはり中国人かなと思ってリビングに椅子を勧めた。真剣な顔をして、
「先生、早速ですけど僕、結婚したい人がいるんです。でもお父さんが許してくれないので、先生にいっしょに来て欲しいと思っているんですけど、いいでしょうか」
「そりゃいいけど、彼女は日本人？」
「はい、日本人です」
「福岡市の人ですか」
「いいえ、熊本です。市内じゃなくて、ちょっと田舎の方です」
「田舎って、阿蘇の方とか、山の方」
「いいえ、海の方です。天草っていうところです」
「天草？　それは遠いね。そしてまたそんな遠いところの人とどうして」

腑に落ちないで問い返すと、
「僕がアルバイトしている近くの会社で彼女は経理をしているんです。バイト先の居酒屋にご飯を食べに来ていたんです。僕は始めその居酒屋に皿洗いで入っていたんですけど、二年以上前から料理もさせてもらえるようになって、それで出来た料理を運んだりしているうちに、彼女とも話すようになって、彼女がおいしいと言ってくれて、よく褒めてくれるんです。それでだんだん親しくなっていったんです。彼女は天草で高校を卒業した後、福岡市の専門学校に行って、会社に就職して、居酒屋の近くで一人暮らししているんです」
「行ってあげていいけど」と言うと、
「明日、僕迎えに来ます。運転できるので友達の車借りていますから、九時くらいにいいですか」
「うん、いいよ」と言ってから、話は何もかも出来上がっていたんだ、私の了解を得るだけになっていたんだ、と思った。
「そしたら明日、九時に迎えに来ます」と言って李祥兆は立ち上がった。安心したのか頬の筋肉が少し緩んでいた。
約束通り、九時少し前に迎えに来た。
「高速で行きます。ここは高速へ入るのに便利がいいですね。入り口がすぐそこですから」
「運転免許いつ取ったの、高速は大丈夫なん」
「大丈夫ですよ。普通の道より高速の方が楽です。なぜなら信号も無いし、その他いろいろなものが目に入らないでしょうが。運転免許ですか。日本に来てすぐ取りました」
「若い人はなんでも早いね。ところで車は誰のものなの、立派な車じゃないですか」
「はい、先輩から借りました。先生は知らない人ですよ」
「天草って言ったけど、どこですか」
「大矢野町です」
「それじゃ、島に入ってすぐのところね。牛深なんて遠いところじゃなくてよかった。それで話は変わるけど、あんた大連て言うとったよね」
「そうです。大連からです。戦争前、大連には日本人が沢山いたでしょう。だから、日本語話せる人が多くて、羨ましく思っていました。高校卒業したら日本に行って日本語勉強したいって、子供の時からずっと思っていたんです。やっと日本行きの許可が出て、それは嬉しかったですよ」
「あんた、今幾つ」

「二十三です。二十で福岡に来ました。自分で働いて大学に行こうと思って福岡に来ました。福岡には大学もいろいろありますから。けど福大に行きたいと思っていたんです。目的にしていた大学に合格できてよかったです」

「それで、将来は大連へ帰るのね。大連でなにするつもり」

「父は映画館も持っているし、店も幾つか持っています。それで父の商売の手伝いしながら、ビジネスを大きくしたいし、できたら日本語を生かして日中の貿易もしたいと思っています」

「ちゃんと将来のビジョン持っているんですね」

そんなことを話しているうちに車は高速を降りていた。みかん畑や海が見えだし、きれいな景色に見とれていると、「到着しました。ここです」と声がして、夢から覚めたように周囲を見回すと、目の前に青々と海が広がり、のたりのたりと波が打ち返していた。家の前に海が広がっている。見慣れない景色に驚いて車を降りた。おばあさんらしき人とお母さんに迎えられて玄関に入った。

はじめましてと挨拶を交わし、案内されてお座敷へ。おばあさんとお母さんは両手をついて、「遠いところまで来ていただいて」と丁寧に挨拶された。座敷の縁側のガラスを通して、青々と広がる海が見える。なんてすばらしい景色、座敷に居ながらにしてこんな景色を見ることが出来るなんて、と感心していると、お母さんがどうぞとお茶を出してくださった。彼女も出てきて、「お世話をおかけします」とテーブルの前に座って小声で李祥兆となにかしゃべっていた。

二人を並べて見ると、いいカップルに見える。李祥兆はすらりと背が高く、顔もハンサムとまでは言えなくとも、まあ、近い部類には入るだろう。彼女もまた中肉中背、今風のちょっと可愛い顔をしている。いいじゃないと心の中で呟いた。

人は見た目だけで結婚相手を決めるわけでもないが、半分以上は見た目で決めているかも知れない。彼女から見れば李祥兆は外国へ来て、働きながら勉強している。同情心も湧くだろうし、自立したしっかり者にも見えるだろう。

一方、李祥兆から見れば、長年憧れていた日本。感じのいい女性に優しくされれば、それはもう、心を奪われてしまうだろう。なるほどと納得できた。

父親が、遠いところをすみません、と言いながら、私の横に座った。その瞬間、大声で、

「お前ね、先生を連れてきたら俺が許すぐらい思う

とったら、大間違いぞ。俺は許さん」
あまりの大声に私はぶるっと震えた。
「大体ね、大学も卒業せんで、学生の分際で子供まで作りおって。ちゃんと大学でも卒業して、就職もして、それから結婚したい、とでも相談に来るんなら、いざ知らず、卒業もせんで、それで結婚したいなんて、どの面下げて来らるっとか」
子供が出来ていたのか、と私は初めて知った。それで急いでいたんだ。最近では珍しいことではない。出来ちゃった婚とか言って、よく耳にするようになったから。
「俺は中国人は好かん。ルミ子、お前もお前たい。子供産んでどうやって育てるって言うとか。仕事はされんごとなるとぞ。分かっとるとか」
「分かっとうよ。仕事は続けるよ」
「子供抱えて仕事続けるってか。そげなこと出来るもんか」
「出来るよ。保育園に預ける？　そげなかわいそうなことするとか。かわいそうに。それに中国に行って暮らすとやろうが。周りはみんな中国人やろうが。親戚も近所の人も言葉も通じんとに」
「お父さん、なん言いようと。福岡はね、みんなそうしようとよ。子供預けて女もみんな働きようとたい。それは当たり前のことたい。言葉は今、勉強しよる。そのうち中国語しゃべれるようになるよ」
黙って座っていたおばあさんが口を開いた。
「としお、お前ね、そげんいつまんでもやかましゅう言わんでもよかろうもん。ルミ子の腹には子供もおるとぞ。二人は好きおうとるとやろが。いつまんでも反対して、どげんする気でおるとか」
ここで、父親の名前や彼女がルミ子って言うことも分かった。二階から階段を降りて来る足音がして、若い男がルミ子の斜め後ろに座り、
「お父さん、大抵で許してやったらどげんね。姉ちゃんはもう三十になるとよ。結婚許さんとか言うて、どげんする気でおるとね。姉ちゃん独身でおれって言うとね」
「お前たちがなんて言おうが、俺は絶対に許さん」
「そしたらね、お父さん、許さんでもいいから、認めるだけでいいけん認めて。それならよかろ」とルミ子が言った。
父親は一言もなく、ぷいっと立ち上がって玄関から外へ出て行った。ふと李祥兆の方を見ると、蛙の面に水とでも言おうか、あれほどの父親の言葉にも全く動揺することもなく、どこ吹く風というような格好で平然として

座っている。女に惚れられているという男の自信というものを感じた。これは父親の負けだなと思った。

お母さんが大鉢に盛った鯛の活き作りを抱えてテーブルの上に、弟も大きな鉢盛の皿と寿司の大皿を、続いてお箸や小皿をテーブルに並べた。二人のためのお祝いの席まで準備されていたなんて、知らないのは父親一人だったのだろうか。

その時、玄関の戸が開く音がして、父親が戻って来た。ふと、父親の顔を見て、外に出て行かれて泣いて来られたんだと、その気持ちを察すると、胸がきゅうんとした。

父親は私の横に座ると、「認めるだけ認めるたい。認めるだけぞ」と厳しい口調で言った。

「それでいいよ。認めてもらえれば、それでいいよ」

心なしか、その場の空気がほころんだような気がした。「許す」と「認める」、この二つの言葉にどれほどの違いがあるのだろう。本心ではないが仕方がないといった気持ちだったのだろうか。

李祥兆は依然として他人事のような顔をして座っていた。おばあさんが場を和ませるような穏やかな顔をして、「じゃ、ビールを注いで」とお母さんに言った。

乾杯、と言いたいところだろうが、みんな場を察して、無言のままコップを高く上げた。おばあさんが、「どうぞ、どうぞ、ゆっくりお上がってください」と言ってお皿にお刺し身を取ってくださった。私はお刺身を一口二口食べて、そのおいしさに、

「まあ、おいしいですね。こんなお刺し身、福岡では食べられませんよ」

「そうですか。天草は田舎で、なあもなかですばって、魚だけはですな、海がそこですけ」

おいしいものを口に運んで空気も少しずつ和やかになってきた。私は一言喋ったことでそれが迎え水となり、溜まっていた言いたいことが口を突いて出てきた。

「お父さんは立派ですよ。間違ったことは一つもありません。心ある日本人の父親なら、お父さんと同じようなことを言われますよ。きちんと大学を卒業して、就職して、ということは当たり前のことです。しかし、今は時代が変わってしまって、『出来ちゃった婚』なんて笑って言えるような時代になってしまいました。一世代前の私たちにとっては考えられないことですよ。お父さんのおっしゃることは立派なことです」

「ほんとに時代が変わりましたね」

お母さんが初めて口を開いた。

「ルミ子は中国に行ってしまうんやね」とおばあさん。

「あと二年はこっちにおるよ。彼が卒業するまでは。

それに中国いうても大連やけ、近いよ。北海道より近いとよ。しょっちゅう帰って来られるが」
「それでも外国に行ってしもうたと思うたら、やっぱ寂しいたいね」とおばあさんが言った。
たった一人の女の子、お母さんは寂しくなるに違いない。おばあさんにとっても同じことだろう。

帰る時が来た。表に出ると、海は相も変わらずのたりのたりと波を打ち返していた。おばあさんとお母さんがお土産の袋を抱えて、「遠いところをご迷惑おかけしました」と挨拶された。役に立ったとは思えないが、一応これで形が付いたのかも知れない。いい家族だと思いながら車に乗った。車の中でルミ子が、「先生ありがとうございました」と言った。
「ルミ子って、可愛い名前ね。両親はいい名前付けてくださったのね」と私は言った。

それから何カ月か経ったある日、李祥兆から電話があった。
「今、天草に来ているんです。女の子が生まれました」
「それはおめでとう。ルミ子さんも元気にしていますか」
「母子ともにとても元気って先生に言われました」
「それは良かった。ほんとにおめでとう。ルミ子さん、大事にしてね」
「はい、後で先生には写真送ります」
数日後、五、六枚の写真が送ってきた。お母さんに抱っこされた赤ん坊。おばあさんにも。母親になったルミ子と長女。そして父親になった李祥兆。彼は立派な家族の一員になっていた。私の頬は緩んで、「いい家族だ」と呟いた。

今年春（令和四年）、長女が福岡の大学に入学したという手紙と写真が届いた。あれから十八年、私は驚いた。今年八十九歳の私にとって、十八年はあっと言う間の時間だった。
李祥兆は日本国籍も取って大連と天草の間を行ったり来たりしている。子供も女の子ばかり四人に増え、ピアノやバレエを習わせ、そのつど可愛い写真を送ってくれた。天草で着物を着て撮った可愛い写真。お母さんやお父さん、おばあさんに手を引かれたり、抱っこされたり、また、大連で中国の両親に抱かれた写真も。それを眺めながら私も幸せな気持ちになるのだった。